

## 研究ノート

聖書ヘブル語統辞論(Syntax)のテキスト

### 言語学(Textlinguistik)的考察

——列王紀上第一章の分析を例として——

勝村 弘也

本研究は一九八〇年夏学期ハイデルベルク大学神学部における旧約学 Übung「ヘブル語統辞論」での作業結果をもとに、若干の方法論的省察を加えつつ、ヘブル語の文章構造について論じたものである。この作業には、同大学ヘブル語担当の H. Schulz, R. Rendtorff 教授の助手 E. Blum 及び筆者が参加した。本研究では、この Übung の中で実験的に応用した「テキスト言語学」(Textlinguistik)の方法をより積極的に導入するとともに、この新しい言語学の基礎概念を紙面の許す限り明確にする様努力した。

#### 一、ヘブル語文法の現状と新しい動き

D・ミヘルは近年発表したヘブル語統辞論に関する著作の序文でヘブル語文法の現状を次のように述べている。<sup>(1)</sup>——E・カウチの改訂したゲセニウス(Wilhelm Gesenius, 1786-1842)のヘブル語文法は、今日もなお旧約学研究にとって標準的な文法

書でありつづけている。この古典的名著はその後著わされたヘブル語文法に関する重要な研究のほとんどどの頁にも影響を及ぼしている程である。新しい言語学の方法もこのゲセニウス文法に対してほとんど何ら新しいものをもたらしてはいない。この文法が一世紀にわたって生きのび、一九六二年には一九〇九年の二八版が何の変更もなしに二九版として再版されたという事実は、ヘブル語研究の全体的状況を象徴的に物語っている。

——とは言え、旧約学研究一般に見られる最近の傾向と対応して言語学の新しい発展の影響下に従来とは異なる観点からヘブル語文法を考えなおそうとする動きもあらわれてきた。現在、西独のヘブル語教育において標準的教科書となりつつある W・シュナイダーの文法書は、かなり最近の言語学の成果をとり入れており、随所に新しい提案がみられる。しかし、この書も統辞論に関して後に見る様にゲセニウス文法の枠を大きく越え出てはおらず、いわば十九世紀来の古い文法と将来あらわれるべき新しい文法との過渡的作品とみることができよう。

近年、特に一九六〇年代後半以降のヘブル語研究の新傾向は次の二つの流れに要約できる。(1)比較セム語学の進歩によるもの。ことにウガリット語の発見はヘブル語研究にも多大の影響を及ぼしつつある。(2)新しい言語学、言語哲学、さらにテキスト科学(Textwissenschaft)の成果をヘブル語に応用しようとする傾向。

本研究は、この第二の傾向にそつたヘル語統辞論に関する一考察である。

## 二、統辞論とテキスト統辞論 (Textsyntax)

従来のヘル語文法は、伝統的に基礎論 (Elementarlehre、音声及び文字を論じる)、形態論 (Formlehre)、統辞論又は構文論 (Syntax) の三部よりなる。後二者について少し詳しく見ると、形態論は品詞論的領域に、統辞論は文章論的領域にはほ対応していることがわかる。ゲセニウスは第二部を「形態論又は品詞について」としている。ここでは語の形態が品詞ごとに論じられる。統辞論は内容的にみて、文における品詞のあり方を論じる部分 (動詞・名詞・代名詞の各統辞法) と文を文全体として考察する部分 (以下「文論」とする) よりなる。本研究は文における語の配列の規則、即ち語順について——特に文頭に来る語について——論じるものであるが、従来の区分に従えば、統辞論の一部をなす文論中の名詞文・動詞文・複合文について論じる文一般 (ゲセニウス文法では *Der Satz im allgemeinen*) の項目に該当する。この中で文頭にくる語の品詞に中心的関心があつた点に注意する必要がある。

ところで旧来の文法が扱う権利をもつと考へていた最大の文法単位は文であつた。従つて、「文を越えたところには、常に他の文しかない」。換言すれば、一つの文を前後の文との関連で、即ち文脈から観察するということがなかつた。テキスト言

語学では「文の限界を越えて」テキストを言語生成の分析や規則発生の出発点となるべき単位として取りあげる。ここであつたテキストとは文の継起的連続たる運用言語 (Performance) をいう。文はテキストの構成要素なのであり、テキストは文からなる。だが、文がそれを構成する語の単なる総和ではないのと同様、テキストは単に文の総和なのではない。テキストは独自の言語単位なのであり、独自の規則をもつ。

ここで方法的概念を明確にするため、テキストを研究対象とするテキスト言語学の構成を概観しておく。W・ドレスラーによれば、テキスト言語学は、テキスト意味論 (Textsemantik) テキストブラジマティク (Textpragmatik) テキスト統辞論 (Textsyntax) の三部門よりなる。Semantikでは、テキストの意味は何か。またその意味はテキスト中でどのように構成されているかを論じる。Pragmatikは (言語外的) コンテキストの中でテキストのもつ機能を探究する。Syntaxでは、テキストの意味は、統辞論上どのように表現されているか、また表現されるかを論じる。この中で、Pragmatikはふつう言語学には入らない。テキスト文法 (Textgrammatik) は、意味論と統辞論を包括的に論じるものである。本研究では、テキストの分析にあたり、主としてドレスラーのテキスト文法の方法を活用した。Pragmatikでは、テキストと著者の関係のみではなく、テキストの受け手、つまり聴衆ないし読者へのテキストの効果

をも問題とする<sup>(9)</sup>。今日では、テキスト文法の眼界が自覚されつつあり、言語学的テキスト理論の必要が云々<sup>(10)</sup>されている。テキストの分析にあたってはこの点も考慮した。なお以上のテキストト言語学の三部門への区分は、モリス等の記号学(Semiotic)によつて基礎づけられる。モリスが Pragmatic は他の二部門(Semantik, Syntaktik)を前提とする<sup>(11)</sup>と述べている点は注目し値する<sup>(11)</sup>。

言語学は、言語の各レヴェル(音素・形態素・文・テキスト)が階層関係をなしていることを明らかにした。どのレヴェルも単独では意味を生み出せず、あるレヴェルに属する単位はいずれも、上位のレヴェルに組み込むことができたときはじめて意味をもつ。文の意味はテキストにおいてはじめて明確に定められるのである。プレットによれば、テキスト統辞論は次の二つの観察方向をとることができる。(1)最小の言語記号としての音素からテキストへという総合的方法。(2)マクロな記号としてのテキストから音素へという分析的方法<sup>(13)</sup>。従つて、テキストの構成要素としての文を論じるべき新しい文論は、この分析・総合の二方向から論じられる必要がある。

ここで問題の所在を明らかにするため、次節では従来の文法諸家の見解を概観しておく。

### 三、動詞文・名詞文・複合文

ヘブル語文は、文の構造と品詞の関係から動詞文・名詞文・

複合文または複合名詞文の三つの型に分類されるが、この分類には二通りの方法がある。一つは、文頭にくる語の品詞によつて文を定義する仕方<sup>(12)</sup>で、他は、述語の品詞にもとづく。

(1)前者によれば、文頭に一つの定動詞(Verbum finitum)がくる文を動詞文と定義し、文頭に一つの名詞類(Nomen)がくる文を名詞文とする。なお、ヘブル語文法で Nomen とはいえ、ふつう「名詞(Substantiv)の他、形容詞、教詞をさす。これらはその形態と用法において何らの差違もない」とされる。複合名詞文とは、名詞類が文頭にきて、述語が独立した一つの文からなるような文をいう。この定義法では、定動詞の有無にかかわらず、全ての複合文は複合名詞文となる。W・シュナイダーとD・ミヘル<sup>(15)</sup>の定義法をその代表としてとりあげた。(表一参照)

(2)後者の定義法に従うと、主語及び述語が一つの名詞類またはその同等語(代名詞、分詞等)からなる文を名詞文、主語が一つの名詞類からなり、述語が一つの定動詞からなる文を動詞文という。複合文とは、主語または述語が一つの独立した文からなっている文をいう。ゲセニウス、マイヤー等がこの定義法をとる。(表一参照)

また、古くからこの様な形式上の文の区分と関係して、名詞文と動詞文には意味上の重要な相違があるとされてきた。つまり名詞文は不動固定のもの、状態的なもの即ち存在をあらわし、

これに対して動詞文は動的なものや流動しているもの即ち出来事や行動をあらわすという。しかし、このような形而上学的な意味論上の区別は、元来ヘブル語文の精密な観察から出発したものでないため、必ずしも前述の文の区分とは一致せず、それぞれ文法家は何らかの修正あるいは変更をほどこしてつじつまを合わせようと苦慮している。

(1)の定義法の難点の一つは、文頭に名詞類のくる文がすべて名詞文に分類されてしまう点にある。創世記一章一節は、副詞句(または前置詞十名詞)―定動詞―主格名詞―目的格名詞の語順をとるが、この文は名詞文の一種となる。シュナイダーによれば、名詞文は文頭の名詞類(この例では、*berest*という時の規定)に強調点のある文なのであって、必ずしも状態文である必要はなく、「名詞類について述べる文」とされるから、何ら矛盾する所はないということになるが、どんなものであろうか。なお、同様の定義法をとるミヘルによれば、副詞的規定は例外的に動詞文の文頭にすることが出来るという<sup>18)</sup>。

(2)の定義法の問題点は、ヘブル語のすべての文に主語―述語関係を機械的にあてはめようとする所にある。まず名詞文の主語と述語は「通常、S―Pの語順になり、例外的にP―Sになる」というのが一九世紀末のC・アルプレヒトの研究以来、最近まで定説として通っていたが、アンダーソンは五書中の「無動詞節(verbless clause)」を新しい言語学の方法を使いながら

徹底的に調べあげて、S―Pになる場合とP―Sになる場合の相違を明らかにしようとした<sup>20)</sup>。ここでその結論を述べることはさしひかえるが、P―Sの語順になる確率は約三分の一もあるともかく、「ヘブライ語の文論はことに名詞文の場合、不明なことが多く、翻訳をしいて細かい所で解釈に困ることが多い」(関根正雄)<sup>21)</sup>のであり、実際には、文脈をぬきにして主語―述語関係を云々することは不可能である。また主述関係がヘブル語名詞文を理解するのに有効なモデルであるかどうかきわめて疑わしい。この点を考慮して、シュナイダーは名詞文に限って新しい言語学モデル、テーマ(Thema または既知)とレーマ(Rhema または未知)を適用しているが、例文をテキストから分離して説明しているため不十分なものになっている<sup>22)</sup>。次に、

動詞文の場合であるが、創世記一章三節 *vajjalotel*(彼は分けた)のように、動詞の語形の中に主語たる代名詞が含まみ込まれている文、つまり主語が明示されていない文(この様な説明の仕方自体問題ではあるが、一応この例では接頭辞jが主語を暗示すると考えられる)をどう理解するかがまず問題となろう<sup>23)</sup>。

この問題に関連して、創世記三章二三節 *hanahabot h'issirant*(へびがわたしをだました)をとりあげてみよう。マイヤーの場合「第九一節動詞文」では、この文を *hanahabot* という主語が強調されて文頭にきた動詞文に数えている一方で、「第九二節拡張文と複合文」では、同じ文を複合名詞文として扱ってい

表一 1 動詞文・名詞文・複合文

研  
究  
ノ  
ト

R. Meyer

VS	P : Vf	Handlung/Vorgang od. Zustand (行動 / 経過又は状態)
NS ZNS	S : 名詞 / 同等語又は動詞文 P : 名詞 / 同等語 S又はP : 一つの独立文 (PがNS又はVSのとき) (Sは常に先行)	Aussage über Zustand des Subjekts (主語の状態について述べる)

O. Grether

VS	Vf のある文 (1) 純動詞文又は主後後置の動詞文	Geschehen/Handlung (出来事 / 行動) を表現。出来事の経過における新しい行為。
	(2) 主語前置の動詞文	このVSの性格は多様。先に起ったことを補足説明したり、状態を描写することがある。
NS	Vf のない文	Zuständliches/Beharrendes (状態的なもの / 不変のもの) を表現。持続的事実の記述。

※ZS : NS又はVSにおいて一つの語を特に Hervorhebung (きわ出たせること) のため文頭におくことが出来る。

W. Schneider

VS	Vf が文頭	Vorgang (経過) を描写する。 動詞を強調。物語の前景。
NS	名詞類が文頭	Aussage über Nomen (名詞類について述べる)。名詞類を強調。物語の背景。
ZNS	名詞類が文頭 P : 一つの完全な文	beschreibt Nomen (名詞類を記述する)

D. Michel

VS	Vf が文頭	Handlung/Wirken einer Eigenschaft (行動、特質の活動)
NS ZNS	S : 名詞又は同等語 P : 名詞、形容詞 (分詞) 代名詞、副詞 P : 一つの完全な文 (NS又はVS)	Aussage über ein Subjekt (主語について述べる)。

[略号] VS : 動詞文    NS : 名詞文    ZS : 複合文    ZNS : 複号名詞文  
S : 主語    P : 述語    Vf : 定動詞

る。His'ani(動詞  $h\ddot{a}$  のヒフィル完了形 + Suffix わたしを)には、主語が暗に含まれているとも解しうるからである。この場合、訳は「そのへび、それがわたしをだました。」となる。マイヤーは、二通りの解釈を示すだけで、決定は下していない。もしグラターの定義に従うなら主語前置の動詞文、シュナイダーによるなら複合名詞文としなくてはならない。この様に、同一の文が、定義の仕方によって名詞文とも動詞文とも解しうるのである。

表一は、ドイツの代表的文法家による動詞文・名詞文・複合文の定義をまとめたものである。右欄の意味論上の説明をみると、昔の様に名詞文と動詞文を「状態」と「行為」のような論理的に対立した対概念で把握することが不可能になっていることがわかる。定義を事実と合致させるためには論理的整合性を犠牲にせざるをえない。文の外的特徴からの定義の方は、論理的一貫性をもつようそれぞれ工夫しているが、既に検討したように決定的な分類法はない。その他定義とその例文を詳細に調べてみて気付くのは、各文法家とも聖書テキストの事実に基づいた解釈から出発せず、規則の方を先にたてて置いて、あとからそれにあつた例文をさがしている様に見える点である。特に複合文の場合、例文に韻文の占める割合が異様に大きいばかりか、引用箇所が、文法書間でかなり重複している。ところが、筆者の観察によれば、ふつうの名詞文以外で文頭に名詞類のく

る文は聖書のどの頁にも見出せる程多いのである。

本研究の次節では、従来とは違った観点から文頭に名詞類のくる文をとりあげるが、その前に各文法家が複合文の代表例としてあげている文頭にいわゆる総主語(Haupt-Subjekt または Ueber-Subjekt)のくる文を検討してみたい。

例一(1) JHWH bassamajim kiso (詩篇 11・四) (2) hahā-kām 'enāw beršō (伝道の書 11・一四) (3) šaraj 'iškā lō-'i-qrā 'al-šēmāh šaraj (創世記 17・一五)

例文(1)は、独文に直訳すると、'Jahwe : im Himmel ist sein Thron. となるが、独文ではいわゆる総主語を示すのに、を使う他ない。ところが日本語の「は」の用法にはこの様なものがある。「象は鼻が長い」の「は」である。日本の文法家の中には以前、「象は」を総主語と考え、総主語の下に「鼻が長い」があり、「鼻が」が「長い」の主語であると考える人もあつた。ゲセニウスもシュナイダーも右にあげた様な文を全くその様に考えているのである。現在の国語学者は、もつと勝れた見解を持つており、「象は」を題目と考えたり、既知と未知の関係から説明したりしている。例文(1)をこの点を考慮して訳すと「ヤハウェは、御座が天にある。」例文(2)は、「知者は、目が頭にある。」となる。なお日本語に訳す場合、この様な文の Suffix を訳さない方がよいと思う。「象は、その鼻が長い」とは言わないからである。三上章によれば題目を提示する「Xハ」は、だ

いた。「Xニツイテ言エバ」の心持ちであり、「ハはガノニヲを代行する」。従って目的語と関連する語が文頭に出ている例文(8)の場合も同様に、「おまえの妻サライは、名をサライといつてはならない。」と訳せる。(この場合のハはノの代行)しかし、同じ型の文でも実際には、右にあげた例の様に何でも楽に訳せるというわけにはいかない。

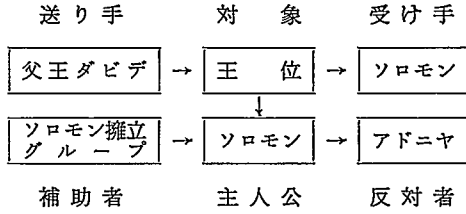
#### 四、列王紀上第一章のテキスト言語学的分析

##### 1 列王紀上第一章の位置、予備的考察

L・ロストは、「ダビデの王位継承の伝承」において、サムエル記下九—二〇及び列王紀上一—二を一つのまとまりをもった文学作品「ダビデ王位継承史」として取りだした。<sup>(27)</sup>この物語が列王紀上二章で終っているという点に関してはほとんど議論の余地がない。出発点については諸説があるが、G・フォン・ラートはロスト説を受け入れている。<sup>(28)</sup>ロストによれば列王紀上第一章はこの物語全体を理解するための鍵であつて、この章の中心には、第二七節の問い「だが、わが王、王をついでその位に座すのか」(mit jeseb al-lisse' 'adon-hammalak 'ah'av)が立っている。<sup>(29)</sup>「それまで地下の震動のようにダビデの統治時代につきまといっていた王位継承問題はここで明るみに出され、はっきりと表面に出てくる。」(ラート)<sup>(30)</sup>こうして物語は急速に終結へと向うのである。以上の如く、ここでとりあげるテキストは、それ自体で完結した物語ではなく前方と後方に向つて広が

っている。<sup>(31)</sup>分析に際しては、物語の流れと逆行して先にあったものを示すアナフォリッシェ(anaphorisch)な要素及び後方をさし示すカタフォリッシェ(kataphorisch)な要素を識別することが大切である。<sup>(32)</sup>この二要素は読者(聴衆)との関連においてみるとカタフォラは読者の期待(Erwartung)を喚起し、アナフォラは読者の期待を満足させる(あるいは裏切る)という特徴をもっている。<sup>(33)</sup>ここで扱うテキストは総じてアナフォリッシェであるが、物語の終結に近い以上当然のことであろう。登場人物がどのような人間であるかも読者にはあらかじめ知られている。六節のアブサロムには何の説明もないが、読者には彼のダビデへの反逆とその不幸な死などがただちに思い出されなくてはならない。テキストの理解を容易にするため、ここでフランスの構造主義者A・J・グレアムの行為体(Aktanten)モデルを使つて登場人物を图示しておく。<sup>(34)</sup>

このグレアムのモデルはロシアのフォルマリストV・プロッブの行為領域(Aktionsbereich)をもとにえられたものである<sup>(35)</sup>が、われわれのテキストに即して考えるとその欠陥もまた明らかである。そこでこの行為体に反主人公(II 反対者)及びその補助者、否定的対象という新しい行為体を導入する。対象(王位)に対しては否定的対象(死)、主人公(ソロモン)に対しては反主人公(アドニヤ)、補助者(ナタン、パテシバ、ザドク、ベナヤ等ソロモン擁立グループ)には、反対補助者(ヨアブア



ビヤタル等アドニヤ擁立グループ)が対立する。アドニヤ派に預言者が欠けていた点には注目する必要がある。なお「ダビデ王位継承史」はいわゆる申命記史家によって、現在のコンテキストの中におかれた。<sup>(37)</sup>

## 2 分析と解釈

一節 「ダビデ王は老いて、年がすぎんだ」。ここは列王紀の冒頭という意味で、また老年ダビデに起った出来事のはじまりという意味で「テキスト開始」(Textanfang)である。<sup>(38)</sup>これは構文にあらわれている。即ち動詞 *beginnen* は文頭におかれず「ダビデ王」という名詞が文頭に来て、物語の中心人物の一人が導入されている。しかし、この文は、士師一三・ニヤサムエル上二・一のようなカプフォーリッシュなテキスト開始 (*waitil is'ahad...*)<sup>(39)</sup> (「むかし」) × × 出身の ○ ○ という名の一人の人がいた」とは大いに異っている。王は定冠詞を伴っておりこの人物が読者に既知であることを示している。このアナフォーリッシュな要素の存在は、我々のテキストが「ダビデ王位継承史」の一部であるという認識と一致する。一節 b から三節までは、文は主として物語の基

本的時制 Imperfekt consecutivum (以下 IC と略す) でつながり、物語が進行していく。<sup>(40)</sup> 途中新しい人物として、王の家来ヤアビシヤグが登場するが構文上目立った点はない。このことは彼らが物語の中で脇役にすぎぬことを暗示する。

四節 この節の最後の文は、*whann'ahik' lo' jeh'ah* という倒置動詞文である。なぜ王が文頭に来たのであろうか。四節全体の構造をみると、(1) 「そのおとめ」をテーマ (既知) 非常に美しくした」をレーマ (未知) とする名詞文。<sup>(41)</sup> (2) 及び (3) 次に IC ではじまる二つの主語のない文がくる。(3) の文「彼女は王の付き添い女となった」は、ほとんど二節の反復であり、新情報ではない。(3) の「彼に仕えた」はその補足である。一般に聖書テキストでは全く同一の文が反復されることは非常に少なく、二度目には補足説明などがつく。(あるいはより具体的にのべる)。(4) が問題の倒置文である。まず形式的にみて動作主 (主語) がおとめから王へと転換している。しかし、これだけでは王が前にくる十分な理由にはならない。これはむしろ読者の期待との関係から説明しよう。「おとめは非常に美しくした」のであるから、それなら王はどうしたのかと読者は考える。そこで「王は」と述べることによってまず読者の緊張を喚起し「彼女を(性的な意味で)知ることがなかった」と結果をのべることとなる。M・ノートはこれを *Der König aber verkehrte nicht mit ihr.* (下線筆者) と記している。<sup>(42)</sup> 以上の分析はフラ



ンスの構造主義者C・ブレモンが提案しているシークェンスの要素に関する図式を使うことによっても正当化しうる。ブレモンのいうシークェンスの三要素をあげると、

①ある行動又は出来事がおこる可能性が開かれる。

②この可能性が実際に起る又は起らない。

③この行動の結果、成果あり又は成果なしでシークェンスが閉じられる。<sup>44)</sup>

この図式を四節に適用すると、①おとめが美しかったのであるから、王が彼女を知る可能性が生じたが、②このことは起らなかった。従って——ここが重要であるが——③新王子は誕生せず(成果なし)、後継者は現存のダビデの息子たちから選ばれることにならざるをえない。<sup>45)</sup>一見断絶している様に見える四節と五節はこのように論理的につながっているのである。ところで、(1)と(4)の文の間には新情報はないと述べたが、これは物語の進行という点からみると遅延をひき起しており、著者の引延し戦術とも考えられる。しかもこの中では性的な意味を持ちうる動詞 *isq* (寝る) は隠蔽されている。この節最後のことば *isq* はアナフォーリッシュであったり、意味論的には二節の *isq* 及び(1)の文と関連しあっている。こうして(1)と(4)の二つの文は独特の緊張関係の中に立っている。<sup>46)</sup>

五節 ここでアドニヤという物語にとって重要な人物が登場する。アドニヤは五——〇節の中心人物、一章全体では反主人公

である。アドニヤが文頭にくるのは当然である。彼はすくなく *isq* *isq* *isq* 「おれが王になるのだ」と宣言する。*isq* (わたし)を文頭に出したこの言い方は非常に強い表現であって、意味論上すぐ前の語 *isq* (高慢になる) と対応する。またこの *isq* は他の王位継承候補者(すでに死んだアムノンやアブサロム、後に登場するソロモン)を暗示している。文法的には *isq* は文の主語というよりも、むしろレーマ(新情報)である。王位継承物語全体の中心には「だれがダビデ王を継いで王位に座するか」(二七節参照)という問が立っているものであり、「おれが王になるのだ」はその答なのである。従って聖書協会訳の様に「わたしは」とせず「が」を使って訳すべきである。<sup>47)</sup>

六節 六bβを直訳すると「彼を(ある女が)アブサロムの後に生んだ」となる。構文的には、「彼を」が文頭に来て、次の動詞「生んだ」は三人称女性単数クアル完了形(だれが生んだのかは不明)となっている。ここで完了形は独文では、過去完了形を使って訳すべきであって、彼が生まれたのは、ここで語っている出来事よりも以前であったことを示す。<sup>48)</sup>物語の中で、事件の進行を破るこのような時制がくる時にはICが文頭に来ることはありえず、主語や目的語がよく前に出る。この様な型の文を複合名詞文とする必要はない。次にこの様なただし書きがここに来た理由を考えてみよう。五bはすでにアブサロムを思い出させるのであるが(サムエル記下一五・一参照)六ba

は「彼もまた、非常に姿がよかった」とのべてアブサロムを意識した言い方になっている。アブサロムが美しかったのは周知の事実だからである(サムエル記下一四・二五以下)。そして六節の一番うしろに人名アブサロムがきて駄目を押すかっこうになっている。アブサロムは王位継承史中最大のマイナス記号なのであるから、アドニヤにアブサロムのイメージをダブらせてアドニヤを決定的なマイナス記号にしようとの著者の意図をみることがができる。しかもそのやり方は遠まわしであり、読者との巧妙なかけひきを想像させる。

七一〇節 七節と八節、九節と一〇節が相互に対立しあっていることはすぐに気がつく。八節はザドク以下ソロモン側の人物名で文章がはじまっているが、これらの人物が物語にとって重要(補助者)であると同時に、前節で導入された人々とは対立関係にある。(対立または対照によって名詞、代名詞が前に出る例として、一四節あなたーわたし及び五〇節客ーアドニヤを参照)この様な関係は、九節bと一〇節の対立に、より明瞭にみられる。構文をみると、

wajjigra' ašr... (7b = 7節) v. 9b

wē'ār... (ソロモン側) lō' qārā' v. 10

Ⓣ<sub>1</sub>のAB:BA'の美し<sub>1</sub>の交差配列(Chiasmus)となっている。<sup>(9)</sup>また八節ではソロモンの名はあらわれず、くりかえしにたる十節ではじめて出現する。八節のアドニヤに協力しなかった

者たちが一体どういう人々なのかという読者の疑問は、一〇節で答えられる。しかし、主人公たるソロモン自身は一節以下でもなかなかドラマの舞台に直接登場せず——会話の中にその名が間接的にあらわれるのみ——三八節ではじめて登場する。この様な技巧が物語に大きな緊張をもたらしている。

一一節 この節のおわりも主語が文頭に出た倒置動詞文となっている。ナタンのバテシバとの会話は疑問文で始まっているが(一一a)、この問いと一一節b「(ところが)わたしたちの主人ダビデは(それを)知らないのです」の間には独特の緊張関係がある。つまり何かが欠けている感じがする。ナタンがバテシバに「アドニヤが王になった、とお聞きになりましたか」と質問したのであるから、論理的にはバテシバはイエスカノーを言わねばならない。ところが物語の中ではバテシバがこの出来事を聞いて知っているかどうかはどうでもよいのである。大事なのは王のダビデが知っているかどうかである。そこでバテシバの答は省略されて、いきなりダビデがくる。「王ダビデならそのような公的事件を知っていなければならぬ」とバテシバも読者も考える。ところが事実はそのような期待に反するのである。(ほとんど四節と同じ手法)二度にわたって期待が裏切られたことよって読者は「ダビデもついに老いぼれた」との印象をもつ。「そこで話がある(there)」(二節)という訳でバテシバにナタンの策略がさすけられるのである。なお、聞き

手の注意を喚起する語 *ata* や *hinne* はカタフォーリックな語の典型といえよう。

以上でテキストの詳細な分析は終る。以下、この章の中で文頭に名詞類のくる(もしくは倒置の起っている)文を右の考察をもとに分類してみる。

1 文頭にくる語を強調する。(五節の説明を参照)。一三節、一七節 (*ata nisbatay*) 二四節。以上は主語のノーバー化。二七節 *me'et 'doni hammatik* の強調。三五節<sup>a</sup>。

2 交差配列による。(九一—一〇節を参照)。一九節 *w'ijqat' la'al* 以下、二五—二六節も同様の構文。

3 前の文の特定の語との対照。(八節を参照)。五〇節。一四節等については5で述べる。

4 順を追って語られている出来事よりも以前に起ったことを示す。(六節を参照)。四一節 *a b w'ehem kilita la'at kol* 「彼らは食事を終ったのであった」(Und zwar hatten sie gerade die Mahlzeit beendet. M. Noth)

5 *'od* + 分詞(まだ……している間に)のあとに文が起る倒置。一四節、二三節、四二節<sup>a</sup>。この構文では必ず倒置が起るのかどうかは不明。なおヨフ記一章一六、一七、一八節参照。

6 その他、四二、四三節の中で(二三節 *a b* 等)倒置がある場合、*'ata*, *hinne*, *gan* 等カタフォーリックな語が文頭にくる場合がある。この様な場合や、名詞や代名詞のあとに未完

了形がくる場合(二四節 *a b*、三五節 *a b* 等)については、時制等の複雑な要素が関係するのでここでは一応判断を保留する。

なお、1~6は相互に排他的な関係にある訳ではない。またその他にも種々の要因が考えられるであろう。ヘブル語の語順についてはあまりにも不明な点が多いのである。

註

(1) D. Michel, Grundlegung einer hebräischen Syntax, Teil I, Neukirchen-Vluyn, 1977.

(2) W. Gesenius-E. Kautzsch, Hebräische Grammatik, Leipzig, 1909<sup>2a</sup>. 以下「セヒマン文法」といえばこの文法書をいう。

(3) 野本真也「旧約学における文芸学的方法の位置」(同志社大学『基督教研究』第四二巻第一号)一九七八年を参照。

(4) W. Schneider, Grammatik des Biblischen Hebräisch, München, 1974.

(5) ロラン・バルト『物語の構造分析』花輪光訳、みすず書房一九七九年所収。「物語の構造分析序説」1966。五頁。

(6) 独語及び英語の「Text」はラテン語 *textus* (元来、織物、網状組織、現代的にいえば構造を意味した)を語源とする。言語学でいうテキストは、言語記号のネットワークを意味する。

言語は *dis-course* の *course* (H. F. Plett, *Textwissen-schaft und Textanalyse*, Heidelberg, 1979) はテキストの *Literatur* (文献及び文芸) よりも広い概念であることを指摘する。ロジクスのニコース、象音された対話、学会での口頭発表等もテキストである。絵本の場合は、テキストを理解するとは言語外的記号、即ち絵も問題としなければならない。ロジクスの対話的記号テキストは言語のみからなるテキストである。Vgl. Th. Lewandowski, *Linguistisches Wörterbuch* 3, Heidelberg 1975, S. 733ff.

(7) W. Dressler, *Einführung in die Textlinguistik*, Tübingen 1973, S. 4.

(8) K. Berger は *Textsemantik* の方法を新約聖書解釈に積極的にとり入れて了。テキストの *Kontextualität* を意味論的には語の結びつき、ネットワークとして組織されたものである。この語彙集合が *semantische Felder* である。K. Berger, *Exegese des Neuen Testaments*, Heidelberg 1977. 巻之二三十一—四三頁参照。

(9) Plett, *ibid.*, S. 79-99; Dressler, *ibid.*, S. 92-101; B. Schlieben-Lange, *Linguistische Pragmatik*, Verlag W. Kohlhammer, 1979; E. Gülich/W. Rahle, *Linguistische Textmodelle*, München 1977, S. 21-59; Berger, *ibid.*, S. 86-127. その他、ヘルガー前掲書中の八六頁の文献、野本前

掲論文注一二六及び一二八の文献を参照。

(10) 野本真也、前掲論文二二三頁以下はこの理論の旧約研究への応用が紹介されている。

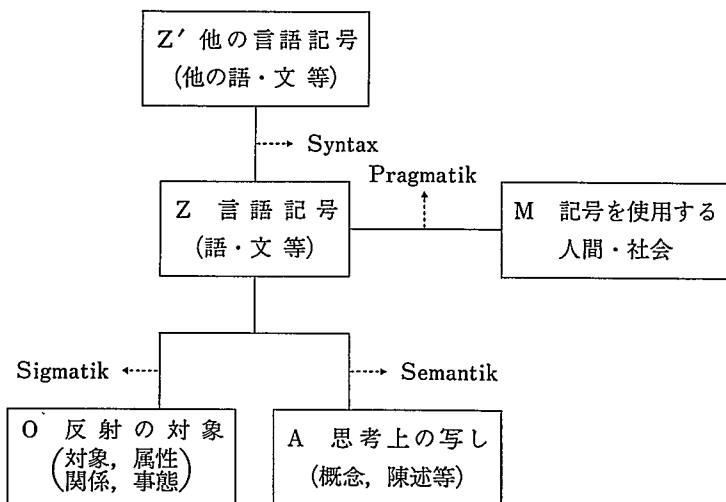
(11) アメリカの行動主義者 Ch. W. Morris は Ch. S. Peirce の記号論の影響を受けたが、記号論を *Syntaktik*, *Semantik*, *Pragmatik* の三部門と区分した。Syntaktik は、記号相互の関係、即ち、能記(記号表現)相互の可能なコンテキストの間の研究である。Semantik は、記号自身の外延(Designat)の指向対象との関係を扱う。これは、ドミンゴ・ペルクス主義哲学者 G. Klaus の *Semantik* と相対する。言語学者は、Klaus のような決定的概念は、Peirce と遊んで、(左図参照)記号の使用とどう決定的概念は、Peirce と遊ぶ。キリスの場合 Pragmatik は、記号とその解釈者の関係を論じており、記号の起原、使用、効果にたずねる。記号使用にまつる社会学的・心理学的諸現象はこの中で論じられる。Vgl. Ch. W. Morris, *Foundations of the Theory of Signs*, 1938; J. Trabant, *Elemente der Semiotik*, München 1976.

(12) ロビン・ペネア、前掲書八頁。

(13) Plett, *ibid.*, S. 58.

(14) W. Schneider, *ibid.* (二頁下) S. 59.

(15) W. Schneider, *ibid.*, S. 160-161. この書の参照箇所を、



Georg Klaus, *Semiotik und Erkenntnistheorie*, Berlin, 1972<sup>3</sup>.  
S. 57 より。

- ミンソントロポスとエトスの如く。(VS) 44. 1. 1. 1, 44. 1. 2. 1, 44. 1. 2. 1, 44. 5 全体。(NS) 44. 1. 1. 2, 44. 1. 2. 2, 44. 1. 2. 3, 44. 1. 2. 4, 44. 2. 1, 44. 2. 2, 44. 4 全体, 48. 2. 2. 1, 48. 2. 3, 54. 1. 4, 54. 2. 4. D. Michel, *Tempora und Satzstellung in den Psalmen*, Bonn 1960. S. 177-187.
- (16) W. Gesenius-E. Kautzsch, *ibid.* (＝註②) S. 470-480. ケセリナヌス第22-24版では(1)の定義法をとった。R. Meyer, *Hebräische Grammatik*, Bd. III, Berlin 1972<sup>2</sup>. S. 6-15.
- (17) Gesenius-Kautzsch, *ibid.*, S. 471.
- (18) Michel, *ibid.*, S. 177. なお創世記一章一節の読み方については、城崎進「旧約釈義 創世記一」教団出版『聖書雑誌』一九六六年四月号及び中沢治樹「創世記一章一―三節の解釈について」『日本の聖書学』山本書店一九六八年、一七八―二〇三頁、野本真也「創世記第一章第一節に関する一考察」『基督教研究』一九七四年を参照。創世記二・四及び五・一からbr'を不定詞とする読み方が可能である点に注目する必要がある。ただしヘンリッホ本文では完了形。
- (19) C. Albrecht, *Die Wortstellung im hebräischen Nominatsatz*, ZAW 7, 1887, S. 218-24; ZAW 8, 1888, S. 249-63.
- (20) F. I. Andersen, *The Hebrew Verbless Clause in the Pentateuch*, JBL Monograph Series XIV, Nashville New

- York, 1970.
- (21) 関根正雄「古代文獻語の翻訳」『言語』一九七五年(『旧約聖書学と共に』下巻山本書店七三頁)。なおこの論文中には、創世記一章一節に関する議論及びアンダーマンの所説が紹介されている。
- (22) Schneider, *ibid.*, S. 163f. 注(4) 参照。
- (23) Gesenius-Kautzsch, *ibid.*, S. 471.
- (24) R. Meyer, *ibid.* (= 注 2), S. 10. 14.
- (25) Gesenius-Kautzsch, *ibid.*, S. 479. Schneider, *ibid.*, S. 165.
- (26) 三上章『象は鼻が長い』くろしお出版一九六〇年。一九八〇年第一版では、題目―述語関係から、大野晋『日本語の文法を考える』岩波新書一九七八年では、既知―未知の要素から論じられている。
- (27) L. Rost, Die Überlieferung von der Thronnachfolge Davids, BWANT III, 6. Stuttgart, 1926.
- (28) G. von Rad, Der Anfang der Geschichtsschreibung im alten Israel, 1944 (Ges. Stud. zum AT, 1958). 荒井章三訳『旧約聖書の様式史的研究』所収「古代ノメソロトをけむる歴史記述の開始」一八四―二二三頁。この物語の性格については、関根正雄『旧約聖書文学史』上、岩波全書二五一―二六五頁を参照。
- (29) Rost, *ibid.*, S. 86f.
- (30) 荒井訳前掲書二〇一頁。
- (31) Rost, *ibid.*, S. 86f.
- (32) Dressler, *ibid.* (= 注 7), S. 22ff.
- (33) Dressler, *ibid.*, S. 57. アンソニーは期待を裏切るように笑う。ハヤマル(笑話)とたじの様な場合が多い。
- (34) A. J. Greimas, *Semantique structurale*, Paris 1966; deutsch, *Strukturelle Semantik*, Braunschweig 1971. S. 157ff.
- (35) V. J. Propp, *Morfologija skazki*, Leningrad, 1928; deutsch, *Morphologie des Märchens*, München 1972. 大木伸一訳『民話の形態学』。
- (36) E. Güttgemanns, Einleitende Bemerkungen zur strukturalen Erzählforschung, in: *Linguistica Biblica* 23/24, 1973. 本論文における「ノマンク」の構造主義者や中心人物「物語の構造分析」の方法については詳しく知らないのである。
- (37) M. Noth, *Überlieferungsgeschichtliche Studien*, 1943; deutsch, *Könige I*, BK, 1968. 拙論「申命記史家の歴史観について」京都大学大学院文学研究科『博士課程研究論文要旨』昭和五〇年度七五―八一頁参照。なおノートによれば列王紀上二章には申命記史家の編集のあとはない。Üb. St. S. 66.

- (33) Dressler, *ibid.*, S. 57-62. F. Schicklberger, *Biblische Literaturkritik und linguistische Texttheorie*, Th Z 34, 1978, S. 69f.
- (36) しかし次のようなテキスト開始もある。Hansist krank. (Dressler, *ibid.*, S. 61)
- (37) Schneider, *ibid.*, S. 182ff. 物語がまじりだす十五ヶ年ほどは I O である。このくハム語の時制がごまじりだす不明な点がまじりだす。私見では、語順との関係から今後解明されるべきである。
- (41) Schicklberger は前掲論文の七一頁以下でナーベトナーの図式を用いたくハム語テキストの分析を行っている。ハムト学派による Funktionale Satzperspektive の基礎概念のキチルとその後の発展がごまじりだす。Gülich/Raible の前掲書(=注9)六〇—八九頁を参照。八九頁では用語の一覽表がある。Vgl. Pletl, *ibid.*, S. 71-77.
- (42) Texterwartung がごまじりだす。Dressler, *ibid.*, S. 55-57 参照。
- (43) Noth, *Könige I*, S. 1.
- (44) Claude Bremond, *Le message narratif*, in: *Communications* 4, 1964 S. 4-32; deutsch, *Die Erzählgeschichte*, in: J. Ijve (Hrsg.), *Literaturwissenschaft und Linguistik*, Bb III, Frankfurt 1972. S. 201. なおこの様な図式は「深層構」に属する。
- (45) ラート前掲論文(=注28)「荒井訳二〇一頁参照。」
- (46) 列王紀下二—二章と非常に関連の深いサムエル記二—二章二—二七節のキーワードは *šib* である。二節にも注意。美と知恵「兄弟殺し」死をもたらす女等のキチーンから王位継承史を分析する J. Blenkinsopp, *Theme and Motif in the Successionhistory and the Yahwist Corpus*, SVT XV, 1966, p. 44-57 を参照。
- (47) 大野晋前掲書(=注26)三四頁以下。
- (48) Schneider, *ibid.*, S. 184f. 物語の背景をのびる完了形である。
- (49) 韻文における交差配列の研究はかなりあるが、散文中でのこの様な技巧に関する研究はほとんどない。Vgl. A. R. Ceresko, *The Chiasitic Word Pattern in Hebrew*, CBQ 38, 1976, S. 303-311. なお関根正雄前掲書(=注28)六二—八〇頁をも参照。
- (50) 問いの後の答の省略という技巧は新約聖書にもある。マルコ一四・三七—一五・九を参照。